



THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES

親鸞仏教センター通信

2018年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>

Twitter https://twitter.com/shinran_bc

2018.12

第67号

迷信と安心

親鸞仏教センター研究員 長谷川 琢哉

「迷信」とは、一般に、合理的根拠を欠いた俗信などを指す言葉であるが、この言葉を広めたのは哲学館（現東洋大学）の創設者、井上円了（1858-1919）であると言われている。よく知られているように円了は、明治期の日本において「妖怪学」という学問を創始した人物でもあった。一見すると不思議に見えるさまざまな現象（円了はそれらを総称して「妖怪」と名づけた）を取り上げ、そのひとつひとつを科学的・合理的に解明し、それらが実は不思議に見えるだけの通常の現象であることを明らかにするのが円了妖怪学の手法である。円了においては、一般民衆の中で信じられているようなお化けや幽霊、占いやまじないの類は、すべて合理的根拠のない「迷信」として退けられる。それゆえ妖怪学は「迷信退治」とも呼ばれていた。

こうした円了の妖怪学に対して、柳田国男が批判的な態度を示したことでもよく知られている。柳田は民俗的な信仰の中には「国民の性質」が含まれていると考え、そうした信仰の諸形態を尊重しつつ研究する「民俗学」を創始した。だからこそ柳田は、「井上円了さんなどに対しては徹頭徹尾反対の意を表せざるを得ない」（『柳田国男全集』第31巻）と言うのである。柳田からすれば、合理主義的な円了のアプローチは、民俗信仰を破壊する悪しき啓蒙主義に見えたのだろう。

しかしながら、円了の妖怪学には別の側面もあることを忘れてはならない。円了は「迷信は一片

の迷心より起る」として、次のように述べている。

迷心とは安心の反対にして、物事の道理に暗く、自分の思ふ様に往かない時に、色々の妄想を起して迷ひ出すことあります、人に此迷心があるから、安心することが出来ず、安心が出来ぬから、益々迷ふ様になります（井上円了『妖怪研究の結果（一名妖怪早わかり）』）

つまり「迷信」とは単に合理的根拠を欠いた俗信であるのではなく、人々を迷わせ、本当の「安心」を妨げる「迷心」から生じるものなのだ。とりわけ「自分の思ふ様に往かない時」などに、人は何かのせいにしたくなる。そのような迷う心の奥底に「妖怪」は現れる。その意味で、妖怪学は人間の迷いの心を徹底的に解明する心理学でもあった。

ただし円了は、「生死禍福の門に迷はざることは、実に難中の至難」（同上）であることをよく理解していた。私たちが本当に「安心」するためには、不思議に見えるだけの妖怪を退けることなくわえて、「真怪」すなわち、本当の不可思議に出会わなければならない。この「難中の至難」を超えたところで、はじめて「宗教」は成立するのである。来年、没後100年をむかえる井上円了の妖怪学の意義について、私たちはあらためて考えるべきであるだろう。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿經』を読む—」④

一念の事実

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿經』を読む—」の第113回と114回がビジョンセンター東京（八重洲南口）で、115回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第111回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

安養国に往生して横さまに五悪趣を截ることが成り立つのは、信心という事実において成り立つのだ。真実信心に立つということは容易なことではない。しかし、親鸞聖人は真実信心に立って、そして本願念佛を仏教の極意だとおっしゃって生き抜かれたわけです。だから親鸞聖人の教えに触れようとするなら、やはりそういう親鸞聖人が為した大切な課題にどこかで我々自身も触れていきたいということがないといけないと思うのです。

■徹底して真実信心に立つ

『無量寿經』に「必ず超絶して去ること得て、
安養國に往生せよ。横に五惡趣を截りて、惡趣
自然に閉じん」（『真宗聖典』57頁、東本願寺出版、
以下『聖典』）とあります。親鸞はこれを正信偈
で「獲信見敬大慶喜 卽横超截五惡趣」（『聖典』
205頁）とおっしゃるのです。獲得信心が成り立つ
なら大慶喜が与えられる。大慶喜が与えられる
ということは、実は、横さまに五惡趣を截るのだと。

「大慶喜」と親鸞聖人がおっしゃっていることは、死ななければ慶喜できないという話ではないはずです。「化身土巻」で、念佛しているのだけれど自力だという問題を親鸞聖人は第二十願で読み込まれるわけですが、その雑心なる自力の念佛には大慶喜がないと押さえるのです。本願を信じたと言うけれど、何かもやもやして一向にたすかっていない。死んでからたすかるという話をしているから、生きている間はもやもやしていてよいのだと逃げているわけです。それを親鸞聖人は徹底して真実信心に立つとおっしゃるわけです。

■前念命終後念即生

我々は相変わらずの凡夫です。にもかかわらず流転輪廻の命を截るので本願力が截るので自分で截るのではない。我々は、自分で超えたり、自分で截ったりしなければいけないと思っている。それを親鸞聖人は豎形の発想だと言うわけです。自力の発想だと。本願他力を信ずるということは、横に截られることをいただくのだと。横に截られるということは、凡夫であることを止める必要はない。凡夫の生活のままに大悲の本願の光の中にあることを信ずる。矛盾しないわけですよ、凡夫の命と。

凡夫の命でありながら、五惡趣を截るとはどういうことだろうと考えたらさっぱりわからない。そういう構造をどういうふうに表現したらよいかというときに、大変難しい問題が絡む。「前念命終 後念即生」という善導大師の言葉を、「本願を信受するは、前念命終なり。即得往生は、後念即生なり」（『聖典』430頁）と親鸞は言っているのです。それを曾我量深先生は、前念と後念というけれども、前念から後念へという念自身は一念

なのだと。二念ではない、一念の前後だと。それは、凡夫であることと光に遇って五悪趣を横さまに截っていただくこととがどういう関係か言おうとすると、前念に死んで後念に生きる、妄念の自己に死んで本願の主体に生きるということは一念なのだと。前念命終後念即生が一念の事実の内容だと。「南無阿弥陀仏」の中に凡夫がそのまま往生するという事実を与えていただけるのだと。

■念々に妄念に死んで新しい命に甦る

凡夫の自我を依り処とする発想から、本願力を依り処とする、転換する。転換したら終わりでなくて、転換するという一念は常に一念なのですよ。往生という事実は、本願力によって成り立つ生の転換を、新しい生に生まれると表現したわけです。だから、それは念々に生まれているわけです。念々に生命が生きているが如くに、念々に妄念に死んで新しい命に蘇るという事実がずっと続くわけです。そういうことが、親鸞聖人がいただいた、信の一念の内容としての「願生彼国、即得往生、住不退転」(『聖典』44頁)という本願成就文のいただき方ではないかと思うのです。

そこには自分というものはないわけです。自分があってやっているわけではない。生命体の血液のはたらき一つをとっても自我がやっているわけではない。生命が生きているということは、もうどんどんとにかく栄養を取り込みながら新しい自己になりつつ生きているわけでしょう。一時として止まらない。生命というものは、変わりつつ変わらない。どうしてそうなっているかと言ってみても、そういうものなのですから。こんな不思議なことは生命でしか成り立たない。それを譬喩にすれば、この自我の命に死んで本願力の命に蘇ることが念々に起こることは何の矛盾もないわけです。新しい自己になりつつ生きていくわけです。なりつつと言うと、だんだんにというふうに、過程的プロセスではないかと考えてしまうけれど、そうではない。一念の事実の中に宗教的な事実をいただいて生きていくということなのです。

(文責：親鸞佛教センター)

親鸞佛教センターの動き

(2018年8月～2018年10月) 一抄出一

■2018年

- 8/7 第5回(通算53回)『尊号真像銘文』研究会
8/10 ご命日のつどい
8/11 東アジア人文フォーラム(北京大学)：長谷川研究員発表「井上円了における進化論哲学の受容」
8/20 第215回英訳『教行信証』研究会
第114回(通算第165回)連続講座「親鸞思想の解説」(中央区・ビジョンセンター東京)
8/21 第15回「三宝としてのサンガ論」研究会
8/27 第191回清沢満之研究会
8/30 第28回「『教行信証』と善導」研究会
9/1、2 第69回日本印度学佛教学会(東洋大学)：青柳研究員発表「智昇と三階教」、中村研究員発表「證空の末法思想—『自筆鈔』／『他筆鈔』の相違に着目して」、長谷川研究員パネル発表「大乗佛教」という言説形成—井上円了と19世紀のグローバルな宗教思潮
9/8、9 第77回日本宗教学会(大谷大学)：長谷川研究員パネル発表「井上円了における「哲学」概念の再考—「哲学宗」を中心にして—」、飯島研究員パネル発表「禅・華厳と日本主義—市川白弦と紀平正美の比較分析を通して—」
9/13 第29回「『教行信証』と善導」研究会
9/14 ご命日のつどい
第16回「三宝としてのサンガ論」研究会
9/19 第6回(通算54回)『尊号真像銘文』研究会
9/25 第216回英訳『教行信証』研究会
9/26 第192回清沢満之研究会
10/1 第115回(通算第166回)連続講座「親鸞思想の解説」(千代田区・東京国際フォーラム)
10/12 ご命日のつどい
第8回「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト全体会
10/15 第30回「『教行信証』と善導」研究会
10/16 第60回現代と親鸞の研究会「21世紀の贈与論」立教大学客員教授：平川克美氏(文京区・親鸞佛教センター)
10/17 第17回「三宝としてのサンガ論」研究会
10/23 第193回清沢満之研究会
10/29 第217回英訳『教行信証』研究会
10/30 第7回(通算55回)『尊号真像銘文』研究会

現代と親鸞の研究会

本研究会では「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起していただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第59回

親鸞思想に立脚した 憲法的刑法学を求めて ——本願法学への歩みと現在——

平川 宗信 氏



平川 宗信（ひらかわ むねのぶ）氏

名古屋大学名誉教授／中京大学名誉教授

2018年6月20日、刑法学者である平川宗信氏をお迎えし、「現代と親鸞の研究会」を開催した。氏は、近代西欧に由来する日本の法律学・法体系を、親鸞思想に立脚して、見直し、主体的に再構築することを課題とされている。

親鸞聖人は本願に立脚して、祖師方の仏法の著作を、縦横無尽に読み抜き、解体し、再構築するかたちで、いただき直しておられる。氏の「再構築する」というご姿勢には、相通じるものがあると感じた。ここにその一端を報告する。

（親鸞佛教センター嘱託研究員 菊池 弘宣）

■ 「仏教刑法学」の問題意識の始まり

私は真宗関係の場で、憲法について話す機会が多いので、憲法学者だと思っている方もおられるようですが、本来の専門は刑法です。若いうちから自分の生きる根拠を仏教に求めて、40歳ころから自分は真宗念仏者であると名のっておりました。そこに立って、自分の仕事である刑法について考えるということを、ライフワークとしてきました。

それではなぜ、仏教思想に基づいた刑法学というものを考えるようになったのか？ それは大学時代、学部の法律学の講義に強烈な違和感をもったからです。そもそも、現在の日本の法律というものは、近代西欧からの「輸入品」です。法律学は「輸入学問」ですから、話されている中身は完全に西欧のことです。「これでは普通の日本人にわかるわけがない」と感じたわけです。法律が日本人一人ひとりのものになるためには、日本の伝統的精神の上に法律学を再構成しなければならないと学生のときに思いました。そ

1944年生まれ。1968年東京大学法学部卒業、1968年同助手、1971年名古屋大学法学部助教授、1981年同教授、2004年中京大学法学部教授、2015年同定年退職。現在、名古屋大学名誉教授・中京大学名誉教授。「真宗大谷派・九条の会」共同代表世話人、（NPO法人）愛知部落解放・人権研究所副理事長。

著書に、『刑法各論』（有斐閣）、『刑事法の基礎』（有斐閣）、『報道被害とメディア改革』（解放出版社）、『憲法的刑事法学の展開——仏教思想を基盤として』（有斐閣）、『憲法と真宗』（真宗大谷派京都教区・願生の会）、『真宗と社会問題〔増補改訂版〕』（念仏者は憲法問題にどう対応するのか）（真宗大谷派・円光寺）、『日本国憲法と真宗～宗教と政治』（真宗大谷派・全国教区会正副議長会）、『いのちの願い——憲法問題に学ぶ』（真宗大谷派・乗満寺）など。論説・講演録に、「裁判員制度と念仏者」（『anjali』19号）、「死刑制度と念仏者」（『身同』30号）、「日本における権力と宗教——砂川政教分離訴訟を素材にして」（『身同』31・32号）、「私たちの求める国家とは何か——本願に立って憲法を選ぶ」（『真宗』2014年6月号）など多数。

して、日本にしか通用しないようなものではなく、日本人として世界に通用する、普遍性のあるものをつくりていかなければならぬと。それで、仏教思想の上に法律学を再構築しようと思ったわけです。

■ 刑法研究者として「本願に生きる」

それから紆余曲折あって、1986年に名古屋別院の公開講座で和田稠先生に出遇いました。そのとき、「ああ、自分が先生とすべき人はこの人だ」と思いました。そこで教えていただいたことは、「仏法を聞くとは頭で理解することではなくて、人生

の方向を決定することである。生き方を決定することである。すなわち本願に生きる」ということであったと思います。また、和田先生は、「本願・淨土とは我々を批判してくる原点である」と言っておられました。つまり「本願に生きる」とは、常に自分自身の生き方が、自分が関わっている社会の在り方が、本願・淨土から批判され続けながら生きていくということであると、そのように私としては先生の教えをいただきました。

■日本人の犯罪觀と刑罰觀

日本人は犯罪というものを災禍・災難として考えているところがあります。犯罪者に対する排除の意識、それが日本人の犯罪觀・刑罰觀の中に根強くあるように感じています。これは日本人の中にある神道的感覺ではないかと思います。古代日本人の罪・罰の意識にまで遡ると、犯罪は「穢れ」です。共同体に神の怒り、災いをもたらすものです。刑罰はその穢れに対する禊、祓であり、祭祀という儀式によって神の怒りを鎮め、再び共同体に平安をもたらすものです。こういう感覺が、今も日本人に根深く残っているのではないかと思っております。

日本人にとって犯罪は、穢れとして排除すべきものであり、穢れに関わった被害者も穢れです。加害者だけでなく、被害者も差別的な目で見られることがあります。その根底には、被害者に対する穢れ觀があるのではないかと思っています。また、犯罪者に対しては拒否的、排除的で、そのため社会復帰が非常に困難になるのだと思います。

■「佛教刑法学（本願刑法学）」の犯罪論と刑罰論

それでは本願に立って刑法を考えるとどうなるのか？本願とは仏の大慈悲心のあらわれです。真宗では人間の行為を「宿業」としてとらえますので、「犯罪は宿業である」ということです。宿業という道理は、いわゆる運命とか宿命という考え方とは違います。また親鸞聖人は「横超」ということを言われます。念仏して本願に出遇うことによって、その宿業の身のままにそれを乗り越えて、本願に生きるという生き方を、新たに始めることができる。それが親鸞聖人の人間觀であると思います。

そして「業縁」ということを言います。我々も実は犯罪の縁となっている。我々がつくっている社会が犯罪を生み出している。そういう意味では犯罪というのは、特定の個人だけの問題ではなくて、我々の問題でもあります。犯罪は犯罪者の宿業であると同時に、我々の共業であり、宿業であると言えるのではないか。

また刑罰については、念仏して本願に出遇い、宿業としての罪を自覚し、新しい道を歩み出す機会になることが期待されるということだと思います。そういう意味では、刑罰は犯罪者に対する本願からの批判であり、我々に対する批判でもあるのです。刑罰を科することは、苦痛・害悪を内容にした批判となるので、それは本願に背く行為でもあります。だから、刑罰は本来的にはないほうがいいわけです。しかしそれでは、一人ひとりのいのちと暮らしは保てない。それが人間の現状であり、刑罰を必要とするのも、我々人類の宿業であると言わざるを得ない。

しかし、それもまた我々の宿業であると自覚すると、刑罰の苦痛を緩和しようとする歩みが始ましていくはずである。そういう視点から、死刑は廃止すべきだと思います。また、いわゆる「修復的司法」という、加害者と被害者、地域の人々の和解を目指していくような刑事司法を、積極的に推進していくべきであると私は思っています。

（文責：親鸞佛教センター）



研究会の様子

※平川氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第42号（2020年6月1日発行予定）に掲載予定です。

第19回「親鸞仏教センター研究交流サロン」報告

本サロンは、有識者からいただいた提言や課題をふまえ、ある共通のテーマにもとづいて、有識者が相互に意見交換のできる研究交流の場として、緩やかでかつ出入り自由なネットワークづくりを試みています。

「宗教」概念を考える

—近代日本における「宗教」としての仏教の生成—

発題者 オリオン・クラウタウ 氏



2018年6月1日、第19回親鸞仏教センター研究交流サロンを開催した。今回は、オリオン・クラウタウ氏をお迎えし、「宗教」という言葉をキーワードに、西洋からさまざまな概念が導入された近代日本において「宗教」や「仏教」が言葉としていかに語られ、いかに定着していったのかという様相について発題していただいた。

また、コメンテーターには、大平浩史氏をお迎えし、日本とは異なった背景をもつ近代中国仏教史の視座からコメントをいただいた。当日、会場では、日中両国の近代における仏教の展開について、さまざまな観点からの議論が交わされた。ここにその一部を報告する。

(親鸞仏教センター研究員 戸次 顕彰)

◆日本における「宗教」

文化庁の『宗教年鑑』によれば、日本の諸宗教団体の信者数は、日本の総人口を大きく上回るという不思議な結果となっている。一方で、ある大学の調査や新聞の世論調査などによると、何か宗教を信じているかという問い合わせに対して、信じていると答える人は3割に満たないというデータもある。だからといって、日本人は決して無宗教ではないということは、これまでもさまざまな研究者によって指摘されてきたことである。しかし、こうした分析やそれに基づく議論のみでは、日本人の宗教意識における矛盾の解明には至らない。そこで今回は「宗教」という言葉の歴史に着目するという方法で、この問題を考えてみたい。

我々が今日用いる言葉の中には、社会(society)・個人(individual)・自由(liberty)のように、明治期に翻訳語として定着したものが多くあり、宗教(religion)もその一つである。ただしここには、さまざまなプロセスを経て定着するに至ったという背景がある。慶応年間から明治6年ころまでのさまざまな文献を調査すると、「宗旨」「宗門」「教法」などさまざまな言葉が見られる。また、当時の政治状況としては、

オリオン・クラウタウ 氏

東北大学大学院国際文化研究科准教授

1980年、ブラジル生まれ。サンパウロ大学(USP)歴史学科卒業、東北大学大学院文学研究科博士課程修了、博士(文学)。日本学術振興会外国人特別研究員、龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員を経て、現在、東北大学大学院国際文化研究科准教授。専門は宗教史学(近代日本仏教)。

主な著書・論文に『近代日本思想としての仏教史学』(法藏館、2012年)、『戦後歴史学と日本仏教』(共編著)、「宗教概念と日本」(島薗進・他編『神・儒・仏の時代』シリーズ日本人と宗教 第2巻)春秋社、2014年)、「近代日本の仏教学における“仏教 Buddhism”の語り方」(末木文美士・他編『ブッダの変貌—交錯する近代仏教』法藏館、2014年)など多数。

明治新政府が成立し、天皇制国家に向かう中で神仏分離が行われた。こうした時期には、「神道非宗教論」が起こるなど、神道や天皇制との関係の中で、宗教概念や仏教の位置づけが議論されていた。

またこのころ、福沢諭吉は明六社を創立し、『明六雑誌』を刊行する。この雑誌の中で、religionに言及されることがあり、特に第6号で森有礼がこれを「宗教」と訳している。このころから、「宗教」という語は日本国内における統一の訳語として、知識人たちに用いられるようになっていった。また、当時の特徴としては、「政」との関係において、「政」に対して個人の領域に関わるものとして「宗教」が語られているという面が見られる。つまり、「宗教」は他の概念との関係性の中で定着した言葉であったという点が重要である。

一方、アカデミズムの場においても、「religion」の意味内容および役割をめぐる論争が見られる。まず、東京(帝国)大学に着任した原坦山は、仏教を学問、耶蘇教を教法として区別し、仏教を「宗教」と呼ぶことは妥当ではなく、「心性哲学」と称すべきであるという立場をとった。ここにはキリスト教との対峙の中で、両者を区別しようとする意図が見られる。続いて

村上専精は「仏教は哲学にして又宗教なり」と主張する。以上のような動向は、「政治」「哲学」「科学」など、他の近代的な概念との関係において「宗教」や「仏教」を位置づけようとした過程であり、「宗教」という概念は、こうした過程の中で定着されてきたものであったといえる。そして「宗教」をめぐるこうした議論は、語り手の必要に応じて再定義されているという点が重要であり、このような意味においてこの作業は現在も進行中なのである。

◆ 「宗教」としての「仏教」

ヨーロッパでは、国民国家が建設されていく時代の中で、徐々に「仏教」が認識されていき、「宗教」という枠組みの中での位置づけが議論されていく。特に18世紀から19世紀にかけて、仏教学という学問が成立していく中で、一つの「宗教」として仏教が語られていく。そのような過程では、本来の仏教の墮落形態として大乗仏教が位置づけられるなどの特徴も見られる。このころ、南条文雄と笠原研寿が渡英して、欧州の東洋学の成果が日本へ伝わっている。これによって日本の仏教学が発展したことは言うまでもないが、逆に欧州の東洋学そのものも大きな変化を遂げたことはあまり知られていない重要なことである。

ところで、欧州の佛教研究がパリ語やサンスクリットを中心として歴史的ブッダに焦点を当て、「大乗」をその墮落形態としてとらえていたとすると、大乗が中心となる日本の仏教は、どのようにそれを受容したのかという問題がある。そこで村上専精に注目してみたい。東京大学で「印度哲学」の講座を担当した村上は、『佛教一貫論』の中で「各經諸論諸宗派の佛教總部を一貫する要件」を示すなど、仏教の統一を論じることを大きな課題としていた。また、1901年の『佛教統一論・大綱論』では「大乗非仏説」を唱え、大谷派から僧籍を脱する状況にも至る。村上は「小乗を仮りに原始的根本仏教とすれば、大乗は開発的仏教」であると主張して、「仏説」と「仏意」とに分けて、大乗を信仰の次元において正当化し、「仏意」として「開発的仏教」であると位置づけた。同様に吉谷覚寿も、歴史的ブッダは「大乗教」を述べていない可能性も考えられるが、社会的な次元において「大乗教」は「真正の仏説」であると主張した。

以上のように、近代日本において「仏教」は、科学的・合理的な「宗教」として再構築されてきた。それは、前近代にはそれほど一般的ではなかった「仏教」という言葉自体が、このプロセスを通じて定着していったということである。こうした長いプロセスを経て近代佛教が形成されてきたといえる。つまり、儀礼や呪術を否定し、もともとの佛教やブッダそのものに



大平 浩史（おおひら こうじ）氏

立命館大学非常勤講師／興隆学林専門学校専任講師

1973年、香川県生まれ。立命館大学文学部史学科東洋史学専攻卒業、同大学院文学研究科博士後期課程修了、博士（文学）。興隆学林専門学校宗学科卒業、同宗学研究科卒業。現在、立命館大学非常勤講師、興隆学林専門学校専任講師。専門は中国近代佛教史。

主な論文等に、「南京国民政府成立期における佛教界と廟產興学運動—新旧両派による「眞の佛教徒」論を中心として—」（『佛教史学研究』第54巻第1号、2011年）、「日本統治期台湾における江善慧と太虚の邂逅—靈泉寺大法会を中心として」（『アジア遊学222 台湾の日本佛教—布教・交流・近代化—』勉誠出版、2018年）など多数。

回帰することを強調し、平等性、普遍性、個人性を重視する佛教の在り方が定着していった。そして、そうでないものが近代の枠組みで、「封建的」や「本当の佛教ではない」対象として批判されていくことがしばしば見られるということになったのである。この点は近代佛教研究の一つの大きな問題でもある。

当日、会場では、クラウタウ氏の発題後、大平浩史氏よりコメントをいただき、その後、フロアからの質疑応答・意見交換が行われた。特に大平氏からは、同じ近代化の動きの中にありながら、異なる様相を呈した中国佛教の視点から、議論の先鞭となるコメントをいただいた。中でも、日本では「宗教」「仏教」の再構築が、宗門関係者・僧侶の間からなされたことに対して、中国では在家者からなされるという違いが見られることが指摘された。また、キリスト教の進出が社会秩序問題と大きく関わっているという中国の特徴的事例を紹介しつつ、日中両国の類似点と相違点を問題提起していただくななど、有意義な研究交流サロンとなった。

（文責：親鸞佛教センター）

※クラウタウ氏の問題提起・大平氏のコメントと質疑は、『現代と親鸞』第41号（2019年12月1日発行予定）に掲載予定です。

『念佛鏡』について

親鸞佛教センター研究員 青柳 英司

『教行信証』「信巻」に引用される善導の三心釈は、親鸞の信心観に大きな影響を与えたものである。しかし善導の三心釈に注目したのは、何も親鸞が最初ではない。中国・唐代から日本の鎌倉時代に至るまで、三心釈はさまざまな著作に影響を与えているのである。そこで本研究会では、親鸞の三心釈理解の独自性を考える前提として、三心釈の受容史を追跡した。ここでは特に、唐代の浄土教文献である『念佛鏡』の、三心釈受容について紹介したい。

1、『念佛鏡』の概要

善導（613-681）の直弟子である懷感（639?-699）の『群疑論』には、三心釈に関する直接の言及は見られない。智昇（生没年不詳）の『集諸經札讐儀』は、三心釈を有する善導の『往生礼讚』を全文にわたって収録しているが、浄土教思想を論ずる性格の著作ではない。これに対して、道鏡（生没年不詳）と善道（生没年不詳）の共著になる『念佛鏡』は、現存する著作としては最も早く、善導の三心釈を思想的な文脈で受容したものである。

本書の造意について、その冒頭には以下のように述べられている。

今、念佛鏡は念佛の人を照明し、永く疑惑を断する者なり。之に依って奉行すれば、必ず苦輪を出ず。　（『大正藏』47・121頁・a）

このように『念佛鏡』は、念佛が「必出苦輪」の法であることを明らかにし、浄土教に対する疑惑を断ち切ることを目的としたものである。特に「第十釈衆疑惑門」では三階教や弥勒信仰、禪宗などを批判し、浄土教の優越性を顕示するものとなっている。

2、『念佛鏡』の三心釈受容

本書が『觀經』の三心に言及するのは、「第一



研究会の様子

勸進念佛門」である。この一段は、

帰信は恒沙の罪を滅し、称念は無量の福を得。凡そ念佛せんと欲さば、要ず信心を起こすべし。若し當に信無くば、空しくして獲る所無かるべし。是の故に經に如是と言うは、信の相なり。　（『大正藏』47・121頁・b）

とあるように、信心の発起が念佛往生の要となることを明かす箇所である。ここではさまざまなかたちで信心の内容が説示されるが、その中ほどでは『淨土論』の「五念門」、「四修」、「觀經」の「三心」が取り上げられる。これは順序が異なるものの、明らかに『往生礼讚』「前序」の影響を受けたものである。その三心の箇所は、以下のとおりである。

上品上生は、若し衆生有りて彼の國に生まれんと願ずれば、三種の心を發して即便ち往生す。何等をか三とする。一には至誠心。二には深心。三には回向發願心なり。三心を具すれば、必ず彼の國に生ず。何者か至誠心。身業に専ら阿弥陀仏を礼す。口業に専ら阿弥陀仏を称す。意業に専ら阿弥陀仏を信ず。乃至、淨土に往生して成仏まで已來、退転を生ぜず。故に至誠心と名づく。深心は即ち是、眞実の信を起こす。専ら仏名を念じ、誓いて淨土に生ず。成仏を期と為して、終に再び疑わず。故に深心と名づく。回向發願心は、所有の礼念の功德をもて、唯淨土に往生して速やかに無上菩提を成することを願う。故に回向發願心と名づく。此れは是、觀經の中の上品上生の法なり。　（『大正藏』47・122頁・a）

これを『往生礼讚』所説の三心釈と比較すると、次のような特徴を見出すことができる。まず『念佛鏡』は、「至誠心」を眞実心とはしない。しかし、深心を「眞実起信」としているため、信心の要素

として「真実」を見ていないわけではない。

むしろ問題は「深心」である。『念佛鏡』の釈相からは、二種深心という概念が窺えない。もちろん凡夫の往生は否定されないし、滅罪の問題にも言及される。しかし「罪惡生死の凡夫」という自覚が、信心の内容とはされない。

また、法の深信の部分に関して、「本願力に乘ずる」という表現は、直接には見られない。もちろん『念佛鏡』には「第二自力他力門」という章が置かれ、

念佛の法門は、阿弥陀仏の本願力に乗ずるに由るが故に、速やかに疾く成仏す。余門に超過すること百千万倍なり。

(『大正藏』47・122頁・c—123頁・a)と述べられている。そのため本書が、他力・本願力を無視しているとは言えないだろう。ただ『念佛鏡』の言う「念佛」とは、称名に限るものではない。

又、無量寿經論に云わく。念佛に五種の門あり。何者をか五と為す。一には礼拝門。身業に専ら阿弥陀仏を禮す。二には讚嘆門。口業に専ら阿弥陀仏の名号を称す。三には作願門。所有の礼念の功德をもて、唯極樂世界に生まれんことを願求す。四には觀察門。行住坐臥に唯、阿弥陀仏を觀察し、速やかに淨土に生まれしむ。五には回向門。但、念佛・礼仏の功德、唯淨土に往生して速やかに無上菩提を成せんと願ず。此れは是、無量寿經論の中の念佛法門なり。(『大正藏』47・121頁・c)

このように『淨土論』所説の「五念門」全体が、「念佛」と位置づけられている。また本書でも、『往生礼讚』と同様に「一行三昧」に対する言及は見られるが、「觀察」と「称名」の優劣を論じる文脈にはなっていない。つまり『念佛鏡』の「念佛」とはさまざまな実践を包摂するものであり、本書の語る「信心」も、それらの実践を通して専ら淨土を願生することが内容とされていると言えるだろう。

3、小結

以上のように『念佛鏡』は、明らかに善導思想の影響下に成立した著作であり、信心を往生・成仏の要としている。しかし、その信心の内容として機の自覚は語られず、称名念佛の専修も強調さ

れない。この理由は不明だが、本書が機の自覚を語らないのは、三階教を意識したことかもしれない。三階教の中心思想の1つである「認悪」は、自己一身に徹底して悪を認めていくものであり、一見すると機の深信に類似している。しかし三階教は当時、国家による禁圧を受けていた。さらに『念佛鏡』は、三階教を厳しく批判している。本書が機の自覚を強調しなかった背景には、このような当時の思想状況が関係している可能性もあるだろう。

(文責：親鸞佛教センター)

■『アンジャリ』第36号刊行 (2018年12月1日)

- 岸 政彦「神は負けても、親切は勝つ」
- 山本芳久「「違和感」からの出発——日本人とキリスト教——」
- 飯田一史「「すべて私が悪い」という「逃げ」を拭う——『聲の形』論——」
- 宮崎 学「死は次なる生命を支える」
- 田原 牧「彼女の役割」
- 伊藤由紀夫「非行少年を鏡として」
- 谷釜了正「躍動する「いのち」——スポーツの効能を考える——」
- 辻 浩和「遊女の信心」
- 松本紹圭「ポスト宗教時代、仏教の挑戦」
- 本多弘之「宗教心と根本言(4)」
- 菊池弘宣「「被害者感情」が本当にどう解けていくのか」



■『現代と親鸞』第39号刊行 (2018年12月1日)

- 研究論文「四分律学の形成と義淨の批判——『四分律行事鈔』における律藏引用の方針をめぐって——」戸次顕彰／「穢土の往生(五)」越部良一／「一向他力」の主張とその波紋——證空・良遍とその系譜に着目して」中村玲太
- 『西方指南鈔』研究会「菩薩の倫理とその根拠」末木文美士
- 現代と親鸞の研究会「よく生きるということ」岸見一郎
- 研究交流サロン「近代日本のナショナリズムを考え——「明治の青年」を事例にして——」発題：中野目徹、コメンテーター：中川未来
- 親鸞佛教センターのつどい「憲法の「古希」について考える」水島朝穂／「本願の國土」本多弘之
- 連続講座「親鸞思想の解明」「淨土を求めるもの——『大無量壽經』を読む—(25)」本多弘之



◇BOOK OF THE YEAR 2018◇

「活字離れ」が叫ばれている昨今、親鸞佛教センターではあらためて読書を通した新しい視点、言葉との出会いを大切にしていきたいと考えています。そこで、当センター職員が、2018年に出会った本をジャンルを問わずに紹介します。

『日本のナルシシズムの罪』

堀有伸著

(新潮新書、2016年)

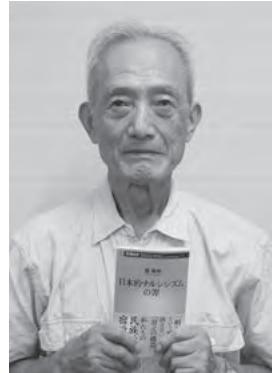
本書の著者は、現在、「ほりメンタルクリニック院長」として活躍している精神科医であり、ナルシシズムという心理学用語を用いながら、現代の日本に起こりつつある特異な事象を解明する。

日本に特徴的に起こっていることを、西欧やアメリカの事象に対比しつつ、冷静に目前の患者の病を観察し、個人より集団、論理より情緒、現実より想像というように、日本人の特徴を取り出して、固有のナルシシズムといえる事象であることを説明していく。

この病は、現実よりも「自分にとって自分がどう感じられるか」、「自分が他人からどう見られるか」というイメージを重要視することに起因するとし、ナルシシズムの度合いが深いと、自分の理想から離れてしまった自分、という現実の姿を受け入れることが困難になり、現実を犠牲にしてでも、自分の理想的なイメージを守ることを優先するようになる、という。

八章からなる本書は、それぞれの章ごとにさまざまな角度から考察する。例えば、第四章では日本人と日本社会がもつ、独特の心性をさまざまな側面から、第六章では現代の社会問題の中から、ブラック企業や新型うつについて、社会病理という側面から分析する。第七章は、東日本大震災後、あえて原発に近い南相馬市に移り住んで、じかに病理を考察するなど、非常に刺激的な内容くなっている。

(本多)



『青白く輝く月を見たか?』

Did the Moon Shed a Pale Light?』

森博嗣著

(講談社タイガ、2017年)

森博嗣初の本格的なSF小説Wシリーズの第6弾である。毎巻ウォーカロンや人工知能などの緻密な描写を通して、人間とは何か?(そしてその定義を求めることは必要なのか?)と自然に問われるシリーズ。

本作は「北極基地に設置され、基地の閉鎖後、忘れられたスーパ・コンピュータ」、オーロラとのまさに思考戦である。物語の一つの核として、オーロラがとる“不可解”(?)な行動についてのミステリー的要素もあるのだが、きっとこうにちがいない…と我々を“人間的な”思考(情?)へと導く筆致にゾッとする。これが独特の寂寥感と解放感をもたらすのだが、それはこちらが描く幻想ではないのか…。いやだとしても、「気まぐれの幻想」に揺れなくなる一冊。

(中村)



『オスマン帝国の解体

文化世界と国民国家』

鈴木薰著

(講談社学術文庫、2018年)

オスマン帝国はしばしば、「長命な巨象」にたとえられる。さまざまな民族、言語、文化、宗教が混在する広大な地域に、極めて長い期間、一定の秩序を実現したからだ。本書は、その「パクス・オトマニカ」(オスマンによる平和)が成立した要因を「イスラム的共存」に求め、この原理が西洋的価値観によって溶解される過程こそ、「オスマン帝国の解体」に他ならなかったと論じている。

そして本書の原本が世に出たのは、9・11のアメリカ同時多発テロの前年である。この段階で著者はすでに、オスマン帝国の崩壊に学んだ、新しい共存システムの確立を訴えている。しかし中東の混迷は、この20年ほどの間にむしろ深まっている。我々は「共存」から遠のきつつあるのだと、あらためて教えられる。

(青柳)



『「利己」と他者のはざまで
—近代日本における社会進化思想』
松本三之介著 (以文社、2017年)

東京大学名誉教授である著者が、90歳を超えて出した新刊。明治期の日本で盛んに受容されていた社会進化論を、学者、政治家、宗教者といった複数の知識人を対象にその内容と特質のちがいを明らかにしている。進化論の受容者たちが、一方で自己保存の本能を考察の出発点にしながら、他方で「利他」的に行はる人間の社会性をどうにかして肯定しようとするという問題が、鮮やかに描き出されている。本書で参照される2次文献などはやや古い印象を受けるが、しかし著者の思索としては、これまで論じられていなかったまったく新しい論点が数多く示されている。90歳を超えてなお、新たな思索を粘り強く行う著者の姿勢に何よりも刺激と感銘を受けた。

(長谷川)



『こころころころ
はがきで送る禅のこころ』
横田南嶺著 (青幻舎、2017年)

相次いで一般向けの好著を刊行されている臨済宗円覚寺派管長の近刊である。もって生まれた自らのいのちを、そして自らのまわりにいるあらゆる存在を、仏心の中にあるものとして、仏心で見つめていくということ——厳しい禪道を貫きながら、徹底的にやさしく禪のこころを伝えるその語り口は、まさに「上求菩提、下化衆生」そのものと思われてくる。かねてより臨済禪の精神を広く平易に語ってきた山田無文師の著書のように、南嶺師の諸著作もまた読み手のこころを揺さぶる。今、『こころころころ』より次の節を引く——「自分の弱さを知り、弱いままでいろんな人の力に支えられながら生きているのだ、という喜びを知ることが、ほんとうの悟りであろうと思います」。

(飯島)

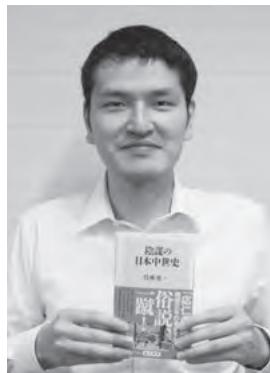


『陰謀の日本中世史』
呂座勇一著 (角川新書、2018年)

本能寺の変は、織田信長の横暴な仕打ちにあった明智光秀が怒り、謀反を起こしたとか、足利義昭が黒幕であったなど、さまざまな陰謀論がある。著者はそのような日本中世史にあふれる陰謀論について先行研究を押さえつつ、史料を読み解き、陰謀論のさまざまな法則を提示しながら分析しており、根拠のない俗説を歴史学の手法にのっとって、一刀両断に切り捨てていくさまは非常に心地よい。

著者は、社会的影響力が強いマスコミがおもしろさを優先して陰謀論を取り上げる風潮に釘を刺すため執筆したとしているが、陰謀論があとを絶たないのは、「時間の無駄」として無関心を決め込む歴史学界側の責任にも言及しているのは興味深い。本書はそんな陰謀論によって自分だけは「歴史の眞実」を知っていると勘違いしないための歴史入門書だ。

(佐々木)



『にせものほんもの』
野間清六著 (朝日新聞社、1961年)

著者の野間清六氏は、鑑査官補として東京帝室博物館(現東京国立博物館)に入り、のちに学芸部長などを務めた人物。本書では、その経験の中で出会ったさまざまなにせものにまつわる話が展開されていく。

亡夫が遺した家宝が二束三文とわかり泣き崩れる老婦人や、一目でわかる贋作を新発見だと息巻く医学博士など、にせものをめぐる人々の物語に引き込まれる。

また、美術品の真贋を見極めるための手引きとして読める本でもある。贋作作成の技術に加え、にせものをほんものと思い込む人間の心理について触れられているのもおもしろい。

にせものを見破るには、正しいすぐれたものに沈潜することが必要だと著者は言う。美術品鑑査に限らず通用しそうなこの言葉が、今は印象に残っている。

(浅平)



親鸞佛教センター研究員と学ぶ——公開講座2018
「語る／語られる仏者
—伝承から読み解く仏教思想—」
参加者募集中!

■「仏法が伝承される歴史空間

—第一結集と『大智度論』一—(全4回)

趣旨文 龍樹の作として伝えられる『大智度論』は、般若経の注釈であり、中国仏教の經典解釈にも大きな影響を与えた論書である。その『大智度論』は「如是我聞」から始まる經典を解釈する際に、「第一結集」の様相を説示するなど、仏法が經典として伝承される歴史空間を語つ

2018年度の公開講座は「語る／語られる仏者—伝承から読み解く仏教思想—」をテーマに、下記のとおり開催します。当センターの研究員と一緒に仏教の聖典をひもとき、人類の歴史を貫いてあきらかにされてきた仏教の言葉に、現代を生きる力を見いだしていきたいと思います。

初めてのお方もどうぞお気軽にご参加ください。



■「教育者としての井上円了・清沢満之」(全4回)

趣旨文 真宗大谷派の留学生として東大哲学科で学び、仏教の近代化につとめた井上円了と清沢満之。両者はそれぞれ、哲学館（現東洋大学）、真宗大学（現大谷大学）の初代学長でもあった。彼らは近代日本において真に仏教を復興するためには教育が不可欠であると考え、自らの理想をもって学校教育に携わった。両者の思想と行動はどのように

いる。このような箇所の読解や、第一結集へ至る経緯の確認作業などを通じて、釈尊が説いた仏法と、それを伝承した人々の営みを確認してみたい。

期日：2018年12月6日(木)・12月13日(木)、20日(木)、27日(木)

担当：戸次顕彰(とづく けんしょう) 研究員



■「親鸞が語る曇鸞—『高僧和讃』を中心にして—」(全4回)

趣旨文 親鸞という名乗りは曇鸞から一字を拝領したものであり、親鸞思想が曇鸞から多大な影響を受けていることは言を俟たない。一方で親鸞は、曇鸞の生涯そのものにも、なみなみならぬ関心を示している。特に曇鸞が、仙経を焼き捨てて淨土教に帰依した故事は、さまざまな著作で繰り返し取り上げられる。これは親鸞が、人間・曇鸞の生き方を通

うに伝えられ、どのように受け継がれているのか。本講座では、大学史という視点も踏まえながら、このことを考えてみたい。

期日：2019年1月10日(木)、17日(木)、24日(木)、31日(木)

担当：長谷川琢哉(はせがわ たくや) 研究員



■時 間：いずれも午後6時30分～8時30分

■資料代：500円(各講座ごと)

各講座の初回に受付にてお支払いください。

※テキスト及び資料は当方で準備いたします。

■会 場：親鸞佛教センター 3階 仏間

して、その思想を受け継いだことを示すものだろう。そこで本講座では『高僧和讃』を中心に、親鸞が語る曇鸞の生涯と思想を読み解いていきたい。

期日：2019年2月7日(木)、14日(木)、21日(木)、28日(木)

担当：青柳英司(あおやぎ えいし) 研究員

■お申し込み：参加ご希望の方は、下記問い合わせ先までご連絡ください。定員35名。連続12回の講座ですが途中参加も歓迎です。

-----問い合わせ先-----

親鸞佛教センター 〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11
TEL 03-3814-4900 FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

リレーコラム

「近現代の真宗をめぐる人々」第3回
(赤沼智善 [1884-1937])

「緻密」「着実」「堅実」「細緻」、そして「実証的」。これらはのちの人たちが言い当たる、その風貌に見える貫禄からは想像できない仏教学者・赤沼智善の学風である。

梵語を中心とする近代仏教学の形成期において、赤沼は大谷大学にパーリ語や原始仏教の講座を開講した。そして赤沼が著した『印度佛教固有名詞辞典』や『漢巴四部四阿含互照録』は今でも仏教研究に必須の工具書として知られる。特に前者は、仏典に登場する人名・地名等の固有名詞を辞書にした大作であり、これは漢・巴・梵の仏典を自身が精読する過程で丁寧にカードをとる作業から誕生した。赤沼は「蟻の労働のやうな仕事」であったと回想している。

我々が膨大な仏典と向き合うことは、大きな崖の前に立って道を尋ねるようなものである。パソコンに向かって研究する今、こうした地道な作業によって仏教学の基礎工事が為された時代があったことを忘れてはならない。同じ道のりでも徒歩と自動車とで、見える景色はちがうはずである。「固有名詞としての人と土地と物語を通じて其處に大聖世尊の御姿を写し出してゐることを思つて、仏徒としての一つ勤めをなし得た喜びをも感ずる」との赤沼の自序は、まるで『中国仏教史学の父』梁・僧祐の『釈迦譜』の序文を髣髴とさせる。(戸次)



赤沼智善氏
(写真:大谷学報 第19巻第3号より)

行事日程のご案内

■親鸞思想の解明

日 時：2018年12月4日(火) 18時30分～20時30分

2019年1月9日(水) 18時30分～20時30分

会 場：東京国際フォーラム ガラス棟(G棟)

■ご命日のつどい

日 時：2018年12月14日(金) 10時～11時30分

※12月のご命日のつどいは親鸞佛教センター報恩講を厳修いたします。

2019年1月11日(金) 10時～11時30分

2019年2月8日(金) 10時～11時30分

会 場：親鸞佛教センター仏間

上記共に、事前申込み不要・無料です。

あとがき

経営学者のピーター・F・ドラッカーは、「重要なことは明日何をするかではなく、今日、何をしたかである」という言葉を残している。恐らくドラッカーは、直線的に己の視界に映る目の将来だけを問題にする浅はかな人間の在り方が、やがて世界を破綻させると危機感を覚えたのだろう。そして、過去から未来へと繋がる永劫の時間軸を貫くような生き方(現在)を思念せよと我々に問うたのではないだろうか。近年、巷では「持続可能な社会(開発)」という言葉を耳にする機会が増えた。それゆえに、「現代という時代に、人間は過去を顧みて未来へ責任がもてるような生きざまになっているか」というドラッカーの問いが、胸に突き刺さる思いがする。(小林)